

金融市場動向

—平成6年1月—

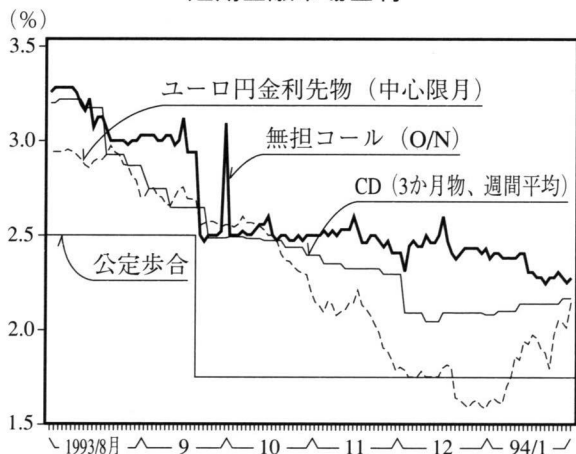
(平成6年2月14日)

1. 短期金融市場

1月中の無担コールオーバーナイト・レートは小幅低下した一方、CD（譲渡性預金）3か月物レートは幾分上昇した。この間、ユーロ円金利先物（金利ベース）については、12月低下の後1月は反転上昇と、大きな振幅がみられた。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は46兆2,365億円と前月（44兆9,963億円）を上回った。

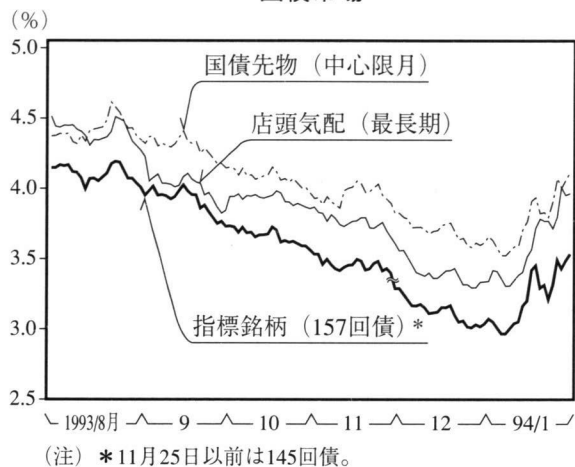
短期金融市場金利



2. 資本市場

1月の国債利回り（157回債）は、上旬中に2.970%（7日、10日）と1987年6月15日（2.865%）以来の水準へ低下したものの、その後は上昇に転じ、結局3.540%で越月した（前月末3.040%、国債先物中心限月は4.128%＜前月末3.613%＞）。

既発債市場利回り
—国債市場—



国債の出来高をみると、現物（店頭取引）は前月を下回った一方、先物は前月を上回った。

株式市況（日経平均株価）は、外国人投資家の買いが続くなか、政治改革関連法が成立した月末には20,229円（前月末比+2,812円）へ上昇した。また、株式出来高（東証第一部

株式市場



月中1営業日平均)は3.96億株と前月(2.68億株)を上回った。

起債動向をみると、長期国債(10年<価格競争入札分>)は1月債が好調な入札となったものの、2月債は債券市況がやや軟調に転じたなかで低調な入札となった(1月6日入札分<1月債>は募入平均利回り3.276%、応募倍率4.77倍、1月26日入札分<2月債>は募入平均利回り3.904%、応募倍率1.44倍)。また、短期国債もやや低調な入札結果となった(1月17日入札分<6か月物>は募入平均利回り1.848%、応募倍率1.41倍)。

国内公募普通社債の起債は中旬以降の軟調な債券市況等を背景に1990年1月以来4年ぶりにゼロとなった(12月4,200億円)。

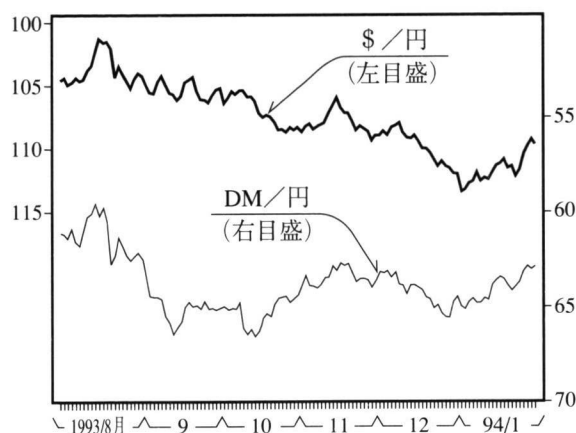
また、国内エクイティ市場での発行(1月込み分、増資を除く)も前月を大きく下回った(12月1,275億円→1月400億円)。

3. 外国為替市場

1月の円の対米ドル直物相場(終値)は緩やかに上昇し、109.55円で越月した(前月末111.89円)。また、円の対マルク相場(東京市場、終値)も緩やかに上昇し、62.84円で越月した(前月末<ニューヨーク相場、終値>64.21円)。

なお、東京外国為替市場の出来高(円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均)は175.3億ドルと、前月(159.7億ドル)を上回った。

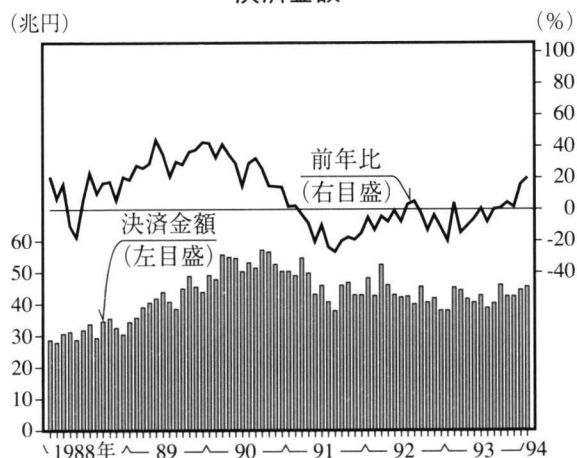
外国為替市場



4. 決済

1月の資金決済の金額(1営業日平均)をみると、手形交換高(東京、前年比+5.9%)、全銀システム取扱高(前年比+14.8%)、外為円決済交換高(同+27.9%)、日本銀行当座預金受払額(同+11.5%)ともに前年同月を上回った。また、国債の決済金額(1営業

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

日平均)についても移転登録(同+46.1%)および振込口座振替(同+7.6%)とも前年同月を上回った。

5. 資金需給、金融調節

1月の資金需給をみると、銀行券要因が5兆5,969億円の余剰(前年同月4兆2,710億円の余剰)となった一方、財政等要因は、源泉所得税を中心とした税揚げや保険の受け入れ等が多額に上ったため、5兆918億円の不足(同3兆4,378億円の不足)となった。こうしたことから全体では5,051億円の余剰(同8,332億円の余剰)となった。

こうした状況下、日本銀行は買入手形の期日落ちを進めること等により資金を吸収した。

2月の資金需給(国債発行織り込み前)をうかがうと、銀行券要因については、月中5,000億円程度の不足(前年同月5,692億円の不足)となる見通しである一方、財政等要因は、国債償還のほか厚生・国民年金の定時払い等がかさむことから3兆7,000億円程度の余剰(同1兆2,607億円の余剰)となる見通しであり、全体では3兆2,000億円程度の資金余剰(同6,915億円の余剰)と予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

1993年12月のM₂+CD平残前年比伸び率(速報)は前月号既報のとおり+1.5%と前月比横ばいとなった。広義流動性の平残前年比

伸び率は+2.9%と前月に比べ0.1%ポイント低下した。

1月の銀行券平残前年比は+4.4%と前月を大幅に上回る伸び率となった。

1月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残(実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ)前年比は+1.5%と、前月に比べ0.2%ポイント伸び率を高めた。一方、総貸出平残(都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ)前年比は+0.5%と3か月連続で既往ボトムの水準にとどまった。

7. 貸出・預金金利

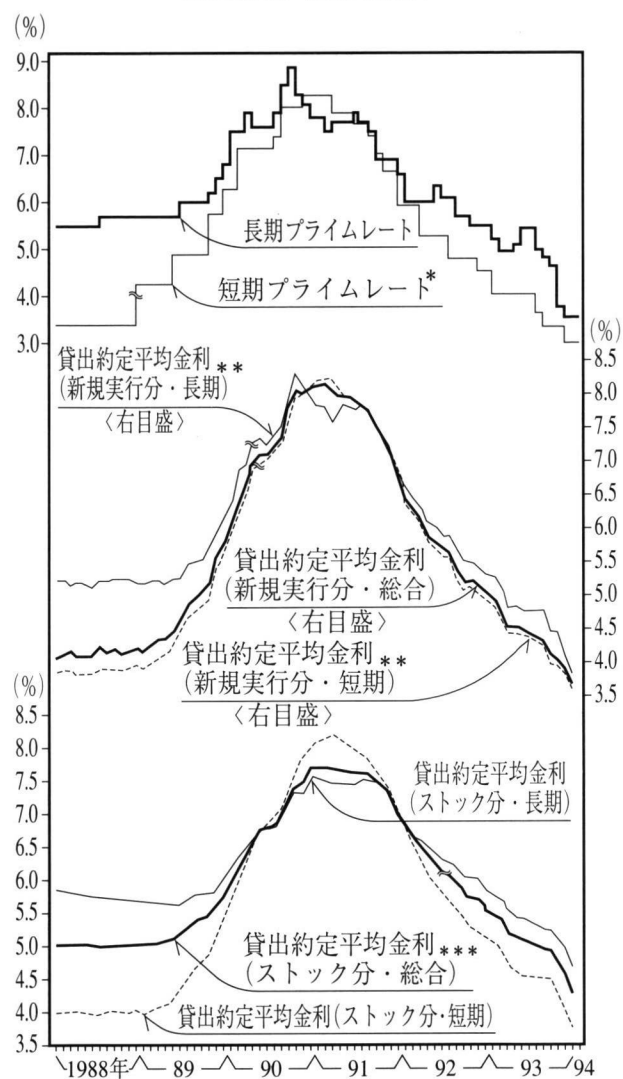
1993年12月中の貸出約定平均金利(全国銀行)をみると、新規実行分については、短期プライムレートの引き下げ(12月9日、3.375%→3.0%)や長期プライムレートの引き下げ(12月10日、3.8%→3.5%)等から短期、長期、総合とも低下し(短期:前月比△0.182%、長期:同△0.312%、総合:同△0.201%)、それぞれ既往ボトムを更新した(総合:11月3.862%→12月3.661%)。

また、ストック分についても、短期、長期、当座貸越、総合のいずれもが低下傾向を持続し(短期:前月比△0.143%、長期:同△0.186%、当座貸越:同△0.188%、総合:同△0.182%)、短期が5年6か月ぶりに既往ボトムを更新したほか、長期、総合も引き続き既往ボトムを更新した(総合:11月4.596%→12月4.414%)。

この間、1993年12月の定期預金金利(自由

金利分、3 か月以上 6 か月未満の全銀受入金利平均) は前月比低下した (11月2.065%→12月1.957%)。

貸出金利 (全国銀行)



(注) * 1989年1月以降は都市銀行のなかで最も多くの数の銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)